お化の面

田中貢太郎

怪談浪曲師浪華綱右衛門（なにわつなえもん）の家に、怪奇なお化（ばけ）の面があった。縦が二尺横が一尺で、左の眼は乳房が垂れさがったように垂れて、右の眼は初月（みかづき）のような半眼（はんがん）、それに蓬蓬（ぼうぼう）の髪の毛、口は五臓六腑が破れ出た血に擬（まが）わして赤い絵具を塗り、その上処どころ濃鼠（こいねず）の布で膏薬張（こうやくばり）をしてあった。

　それは初代林家正蔵が秘蔵していた物であった。その正蔵が百六歳の長寿を保って、沼津で歿（な）くなった際、形見として弟子の中川海老蔵に与えたが、海老蔵は昭和五年の秋、女房に逃げられて、その苦悩のうちに病気になり、久しく病床に呻吟（しんぎん）していたが、某日（あるひ）杖に縋（すが）っ

て、弟子の綱右衛門の家へ現われ、

「人間は、今日在って明日無い命だ、これをおめえにやるぜ」

と云って風呂敷包の中から執(と)りだしたのが、そのお化の面であった。綱右衛門は喜んだ。

「師匠、これを、わっしに」

「形見だから、執っといてくんねえ、乃公(おいら)の後を継いでくれるのは、おめえだけだ」

海老蔵はそれから夕陽の影法師のような力(ちから)ない足どりで帰って往ったが、それから一週間して綱右衛門は、海老蔵の死亡の通知に接した。

其の後綱右衛門は、お化の面を用いて人気を博するつもりで、深川の桜館（さくらかん）でそれを冠（かむ）って四谷怪談をやったところで、前晩まで三四百人来ていた客が、次の晩には十四五人になり、その翌晩は、木戸で喧嘩が起って血の雨が降った。

綱右衛門は恐れをなしてお化の面をしまいこんだが、昭和七年になって、久しぶりに執り出して、弟子の綱行に冠せ、記念の写真を撮って、その後でビールを飲んでいたところで、平生（いつも）は猫のように温順（おとな）しい綱行がちょっとした事で綱右衛門に喰ってかかったので、

「なにを、この野郎」

と云ってビール瓶で殴りつけたので、綱行は負傷するし、つづいて女房が病気になってなかなか癒らず、そんなこんなで家作は人手に渡ってしまった。その時遊びに来たのが伊藤静雨［＃「静雨」はママ］であった。
綱右衛門は静雨［＃「静雨」はママ］に不吉なお面の話をして別れたが、翌日になって静雨［＃「静雨」はママ］から夫人の殁くなったと云う通知を受け取った。
そこで綱右衛門は、すっかり怖気をふるって、昭和十一年三月、菩提寺の浅草玉姫町の永伝寺へ奉納して、永久に同寺に封じこめる事にした。

底本：「伝奇ノ匣6　田中貢太郎日本怪談事典」学研M文庫、学習研究社
　　　2003（平成15）年10月22日初版発行
底本の親本：「新怪談集　実話篇」改造社
　　　1938（昭和13）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
2010年10月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。